

國學院大學學術情報リポジトリ

追悼：岡田精司先生と大嘗祭と私

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-07-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊地, 照夫, Kikuchi, Teruo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000717

追悼

岡田精司先生と大嘗祭と私

菊地 照夫

戦後歴史学の中で日本古代の祭祀、神話の研究を牽引してこられた岡田精司先生が、二〇一九年一月二十五日に逝去された。享年八十九歳。先生は一九二九年十二月二十三日、東京生まれ。一九五四年に国学院大学文学部史学科を卒業後、新潟県、滋賀県の高校で教鞭をとりつつ研究を進め、大阪工業大学に着任。一九七〇年、『古代王権の祭祀と神話』（塙書房）を刊行し、一九七三年、大阪市立大学より博士号が授与される。一九八六年、ご自身の研究テーマである伊勢神宮に近い三重大学にうつり、一九九二年には第二論文集『古代祭祀の史的研究』（塙書房）が刊行され、一九九三年、三重大学定年退職後は名古屋女子大学にも勤めた。先生は古代王権の祭祀の問題のみならず、近代・現代の天皇制祭祀についても積極的に発言し、一九八九年～一九九〇年の「平成」の即位・大嘗祭にあたっては、内閣の即位の礼準備委員会において意見陳述をおこない、滋賀県献穀祭訴訟では原告側証人入

つとめた。一九八一年以来、京都で松前健氏らとともに祭祀史料研究会を組織し、毎月例会を催して、延喜式祝詞や儀式などを輪読し、そこで若手研究者を育成した。

私が岡田先生の学問と出会ったのは、一九八〇年、国学院大学の学部三年生の時であった。

鈴木靖民先生のもとで、同期や後輩の有志と岩波講座『日本歴史』古代2の論文を分担してレポートする勉強会があり、記紀神話や祭祀に関心のあった私は、岡田先生の「記紀神話の成立」を担当し、この論文を読み込むこととなった。

あわせて岡田先生の『古代王権の祭祀と神話』も読み、記紀の神話・伝承と王権祭祀や国家形成過程との関係を究明していく岡田先生の研究手法にすっかり魅了され、これにならって研究に取り組もうと決意し、以後今日に至るまで先生の学問の後を追いつけてきた。

『古代王権の祭祀と神話』のあとがきに、「ふりかえってみると、国学院という環境で学んだことから受けたものが小さくなかった。特に神道考古学のフィルターを通した上で神道祭祀や民俗学にふれえたことは、大きなプラスであった」とあり、先生の学問は国学院大学で学んだからこそ形成されたと述べておられることは、同じ国学院で学んでいる私に大きな励ましとなった。

私と先生との直接の出会いは、一九八二年十一月の日本史

研究会大会の会場であった。たまたま一緒にいた関和彦氏にご紹介いただき、大会後、先生のご案内で会場近くの平野神社を見学した。この時のことは関氏にも印象深い思い出であったらしく、その後たびたび二人の間で話題になることがあった。その関氏も、この三月に岡田先生の後を追うように亡くなられてしまったのは淋しい。

一九八五年、岡田先生は一般向けの啓蒙書『神社の古代史』（大阪書籍）を刊行され、私は国史学会より『国史学』に書評の執筆を依頼された。研究の実績のない自分ごときに岡田先生の本の書評など恐れ多くてお断りしたかったが、断れるような状況でもなく、引き受けることとなった。

この書評で、若かった私は大胆にも、同書の問題点を二つ指摘した。一つは稲作農耕祭祀と神社との関係が十分に明らかにされていないこと、もう一つは出雲大社が取り上げられていないことである。前者は祈年祭や新嘗祭・大嘗祭とも関わるが、実は私はこの部分で岡田先生のお考えにいささか疑問をもっていた。後者は、先生は出雲について、いくつかの論文でそれなりのお考えを示しておられるが、どうも出雲はあまり得意の分野ではなかったらしい。『神社の古代史』は後に増補版が出され、宇佐八幡宮など旧版になかった神社が加わったが、出雲大社が加わることはなかった。そしてここで指摘した二つの問題点はそのまま私の研究テーマとなっ

た。すなわち私は古代王権と稲作農耕祭祀、古代王権と出雲という問題を自分の研究テーマとしていくこととなった。

一九八六年、私は初めての論文を書いた。内容はヤマト王権の新嘗に関わるものであった。律令制下の天皇の行う新嘗儀礼は、即位後最初におこなう大嘗祭と、その後毎年おこなう新嘗祭に区別されており、毎世一度の大嘗祭には畿外の悠紀・主基の斎田で收穫された稲が用いられ、毎年の新嘗祭には畿内の官田（屯田）で收穫された稲が用いられていた。それでは令制以前（大化前代）の王権の新嘗はどのようにおこなわれていたか、これについては岡田先生の「ニイナメ・ヨスクニ儀礼」論という有名な学説があった。先生は、毎世一度の大嘗祭が前代の王権新嘗の系譜を引く祭儀ととらえ、令制前代の新嘗儀は、国造の子女である采女が当地の稲で調理した飯・酒を献上し、聖婚を行なう王権への服属儀礼として行われ、これをニイナメ・ヨスクニ儀礼と称した。要するに先生は、新嘗祭の本質が、地方の諸氏族の服属を表現する食物貢献儀礼とそれにとまなう聖婚儀礼にあるととらえていた。

しかし私はこの説に疑問をもっていた。私は、令制前代のヤマト王権の新嘗は、毎世一度の大嘗祭ではなく、毎年の新嘗祭に継承されているのではないか、すなわち畿内の屯田の稲を用いて行われたのではないか、その祭儀神話がタカミ

ムスヒを指令神とする天孫降臨神話であると考えた。これを論証するために、日本書紀の顕宗三年二月条と四月条を分析し、ここに見える歌荒櫛田と磐余田は王権の直轄地である屯田であり、この記事はヤマト王権の新嘗用の斎田卜定に関わる記事であるという論文を作成した。

岡田先生のニイナメ・ラスクニ儀礼論に異を唱える内容の論文ではあったが、投稿する前に岡田先生のご指導を頂きたいと思い、電話でお願いし、原稿を送った。数日後、岡田先生から電話があり、開口一番「力作ですね」と誉めていただいたのはうれしかった。口頭で修正すべき点や補足が必要な部分を指示していただき、後日返送された原稿にも稚拙な文章に手が入れられており、私の説を補強できる史料や論点をご教示いただき、ご指導のおかげで、より質の高い論文とすることができた。電話でのやりとりの中で、ニイナメ・ラスクニ儀礼についても話が及び、先生は「修正しなければいけませんね」とおっしゃったが、これをどう受け止めていいかは、考えることもできず、複雑な心境だった。

私の論文「顕宗三年紀二月条・四月条に関する一考察―大和王権の新嘗と屯田―」は『千葉史学』第九号に掲載されたが、岡田先生に抜刷を送ったところ、すぐに電話があり、この雑誌は関西ではほとんど出回ってないから渡したい人がいるので抜刷をあと一〇部送ってほしいとのこと。先生の心配

りには、本当に頭が下がった。

その後、令制以前の王権の新嘗の本質を地方豪族の服属儀礼とする岡田先生のニイナメ・ラスクニ儀礼論は、先生の第二論文集『古代祭祀の史的研究』の第三章「大嘗祭の神事と饗宴」において修正され、古い新嘗の神事には服属儀礼の要素は含まれず、神事のあとの饗宴（豊明の宴）の場で地方首長の服属が行われたという見解が提示された。

同論文では、この修正は、岡田莊司氏による、令制以前の「新嘗の神饌・供御は令制の大嘗祭のそれとちがって王権の直轄領（屯田や御県）からの貢納であった」と指摘を受けて入れたのこととしており、岡田莊司氏の論文「大嘗・新嘗の祖型」（『大嘗の祭り』（学生社））が引かれている。岡田莊司氏はこれを受けて、ご自身の指摘によって岡田先生がニイナメ・ラスクニ儀礼論を修正したことを、いくつかのところで紹介している（『訳注日本史料「延喜式」上（集英社）』、『古代の信仰・祭祀』（竹林舎）など）。たしかにそのとおりではあるが、ここには複雑な背景がある。

岡田莊司氏の「大嘗・新嘗の祖型」は、一九八九年に発表された「大嘗・新嘗の淵源―倭屯田を訪ねて―」（『大美和』七七号）に基づくが、この論文には私の論文が引かれており、岡田莊司氏が令制前代の新嘗に屯田の稲が用いられたとする見解は、私の説を踏まえているのである。同論文が発表

された直後には、岡田莊司氏より掲載誌とともに、拙稿を参考させていただいたという旨のお手紙も頂戴した。

先に述べたように、拙稿は岡田先生のご指導のもとで作成し、その過程で先生も自説の問題点には気づかれていた。岡田莊司氏のニイナメ・ラスクニ儀礼批判は正しいが、しかしその批判は岡田先生のご指導の下で作成された拙稿に依拠していたのである。

大嘗祭の本質を王権に対する地方の服属儀礼にとらえ、それに連なるヤマト王権の祭儀としてニイナメ・ラスクニ儀礼を想定する岡田先生の学説は否定された。一方岡田莊司氏は大嘗祭の本質を祖先祭祀にとらえ、その祭神は古代以来皇祖神アマテラス大神であるという説を主張している（『大嘗の祭り』（学生社）。この理解について、岡田先生は『古代祭祀の史的研究』第二章「即位儀・大嘗祭をめぐる問題点」で詳細に疑問点を指摘し批判をおこなっている。私もこの批判は妥当であり、岡田莊司氏の大嘗祭論には問題があると思う。

今年、約三〇年ぶりの天皇代替わりがあり、即位の礼、大嘗祭がおこなわれるが、岡田先生がお元氣であったら、その歴史的な問題点と現在の状況をめぐって積極的に発言されたことであろう。岡田先生の即位・大嘗祭についてのお考えは、『古代祭祀の史的研究』第一章～第四章にまとめられて

いるが、岡田先生のいない今となつては、これをしっかりと読み直し、今回の代替わりをめぐって論じられる諸問題について考えていくしかない。

岡田先生のご冥福をお祈りしつつ、先生の残された業績の継承と発展に取り組んでいきたい。